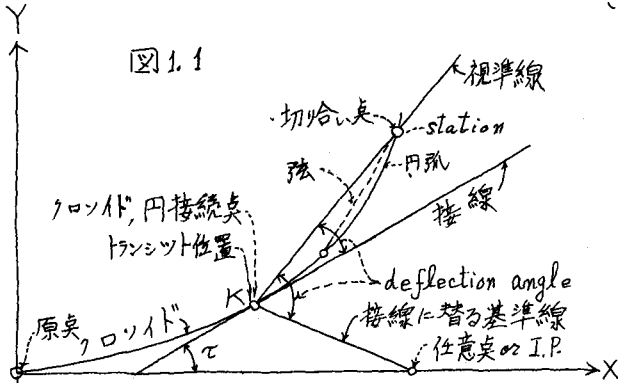


Ⅳ—4 クロソイドに接続する円曲線各点をクロソイドの原点を原点とする共通 X, Y 座標 によって表す解析

道都短期大学 正会員 今井芳雄

§1. 前言

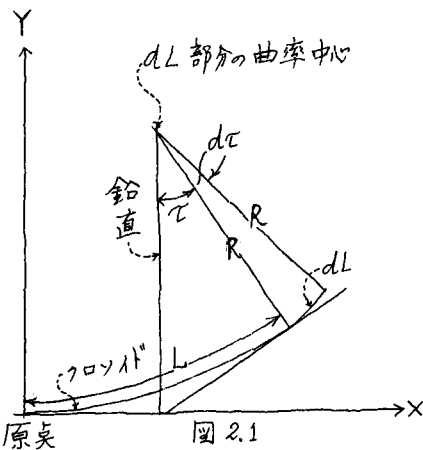
クロソイド曲線は、連続的に半径が変化する曲線であつて、クロソイドの station meter を変数に入れて、その X, Y 座標計算はクロソイドポケットブックの単位クロソイド表の L, x, y 値から精密に計算されている



このクロソイドに続いて布設される円曲線については最早座標値というものは、従来は無く円曲線始点 K (図 1.1) に transit を据え接線から deflection angle を振った視準線と円弧に張る弦長との切り合い点として求め、求め終つたら、順次先を先と設定する方式を出なかつた。この方式は今後も必要であるが deflection angle の基準線は、接線に限られていた。従つてや、窮乏であつた。この時も、円曲線もクロソイドと同様に、sta-

tion の X, Y 座標値が求められておれば、基準線は接線 1 つに制約されることなく座標を利用して地形の見通しに応じて幾通りも選定することが出来る。deflection angle も座標間の角として扱い、任意に計算出来ることになる。筆者は円曲線についても、クロソイドに類似して、station meter から、X, Y 座標を、求める解析を得たので発表するものであります

§2. クロソイド曲線の概要



クロソイド曲線の始点(半径無限大)から半径 R になるまでの曲線長を L (図 2.1) とすれば

$$R \cdot L = \text{constant (クロソイドの性質)} \dots\dots\dots (2.1)$$

$$= C \text{ とおく} \dots\dots\dots (2.2)$$

$$= A^2 \text{ とおく} \dots\dots\dots (2.3)$$

$$\therefore \frac{1}{R} = \frac{L}{C} \dots\dots\dots (2.4)$$

又クロソイド曲線の微小小長 dL については

$$dL = R \cdot d\tau \dots\dots\dots (2.5)$$

$$\therefore d\tau = \frac{1}{R} dL \dots\dots\dots (2.6)$$

$$= \frac{L}{C} dL \dots\dots\dots (2.7)$$

$$\therefore \tau = \int d\tau \dots\dots\dots (2.8)$$

$$= \frac{1}{C} \int L \cdot dL \dots\dots\dots (2.9)$$

$$= \frac{1}{C} \cdot \frac{L^2}{2} + C_1 \dots\dots\dots (2.10)$$

ここで C_1 は積分常数、 $\tau=0$ のときクロソイド長 $L=0$ として C_1 を定める。 $\therefore C_1=0 \dots\dots\dots (2.11)$

$$\begin{aligned} \therefore \tau &= \frac{1}{C} \cdot \frac{1}{2} L^2 \\ &= \frac{1}{2} \cdot \frac{L^2}{R \cdot L} \\ &= \frac{1}{2} \cdot \frac{L}{R} \\ &= \frac{1}{2} \ell^2 \end{aligned}$$

但 $l \equiv \frac{L}{\sqrt{c}}$

從 τ $R \cdot l = \sqrt{c}$

(2.15)式によって π は ρ を知れば直ちに radian 角として求まる。(2.17)式も、用途の多い式である (2.17)

..... (2.12)

----- (2.13)

----- (2.14)

----- (2, 15)

--- (2.16)

式も用途の多岐にわたる (2.17)

§3. 対称凸型クロソイド曲線の接線長

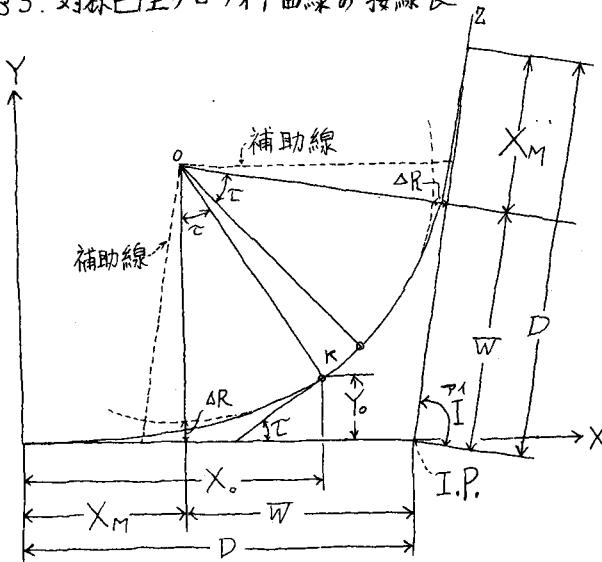


图 3.1

図 3.11 において円の中心 O から接線 $I.P. \sim O$
 $I.P. \sim Z$ に平行に補助線を二本引く

$$l \equiv \frac{L}{\sqrt{c}} \quad \text{--- --- ---} \quad (2.16)$$

$$R + \Delta R = Y_0 + R \cos \tau \dots \dots \dots (3.1)$$

$$= Y_0 + R \cos \frac{1}{2} l^2 \dots \dots (3.2)$$

$$W = \frac{R + \Delta R}{\sin I} - \frac{R + \Delta R}{\tan I} \dots \dots \dots (3.3)$$

$$= \frac{\frac{R + \Delta R}{\tan I}}{\sqrt{1 + \tan^2 I}} - \frac{R + \Delta R}{\tan I} \dots\dots (3.4)$$

$$= \frac{R[(\sqrt{1+\tan^2 I} - 1)(yl + \cos \frac{1}{2} l^2)]}{\tan I} \quad (3.5)$$

$$X_M = X_o - R \sin \tau \quad \text{--- (3.6)}$$

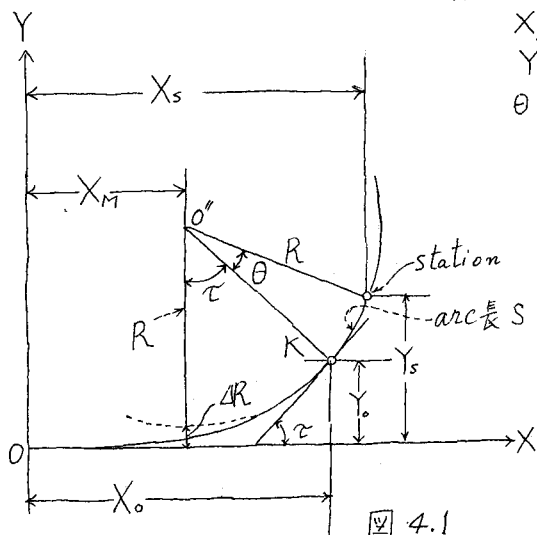
$$D = X_M + W \quad \dots \dots \dots (3.7)$$

$$= R \left[x l - \sin \frac{1}{2} l^2 + \frac{(y l + \cos \frac{1}{2} l^2)(\sqrt{1 + \tan^2 I} - 1)}{\tan I} \right] \quad \text{--- (3.8)}$$

接線長 D は $0 \sim I.P.$ 間の巨弧であり、点 $I.P.$ は X 軸上に在るから座標は $Y=0$ であり、 D は X 座標値である $\sqrt{1+\tan^2 I}$ の根号の $+$, $-$ は $\tan I$ の符号と一致させておらう。

§4. 円曲線の直角座標

④ 4/1において



X_s ... station 9 X座標 ----- (41)

Y_s ... station の Y 座標 • ----- (4.2)

①…クロソイド円曲線接続点Kから円曲線任意stationま
で"の角 ----- (※3)

$$\tau \dots = \frac{1}{2} l^2 \dots (2.15) \quad l \equiv \frac{L}{\sqrt{c}} = \frac{L}{\sqrt{R/L}} \dots (2.16)$$

X_m ...円曲線中心 O'' の X 座標 になる

とすれば $X_s = X_M + R \sin(\tau + \theta) \dots\dots (4.4)$

$$Y_s = (R + \Delta R) - R \cos(\tau + \theta) \dots \dots \dots (4.5)$$

$$= Y_0 + R \cos \tau - R \cos (\tau + \theta) \dots (4b)$$

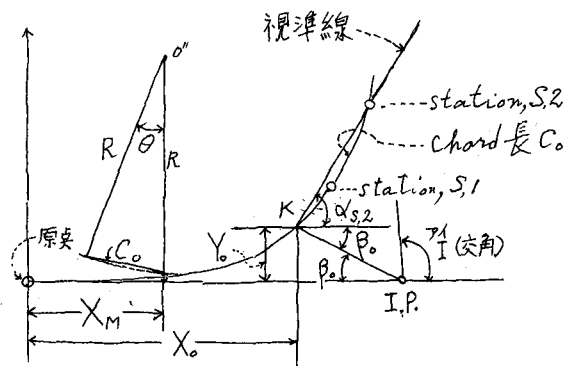
$$\theta = \frac{\text{点} K \text{ から円曲線経過長 } S}{R}$$

円曲線 station 毎の X 座標, Y 座標は (4.4)

式, (45)式で求めるわけでは、クロソイドのX, Y座標計算の筆法に似せて、円曲線の任意 station までの経過円弧長S をとり入れてX, Y座標値 X_s, Y_s を求めたものである

§5. 円曲線布設のための deflection angle

円の半径を R , 中心角 θ の円弧の弦長を C . とする (図 5.1) 然るとき



$$C_o = \sqrt{(R - R \cos \theta)^2 + (R \sin \theta)^2} \dots (5)$$

$$= R \sqrt{2(1 - \cos \theta)} \quad \dots\dots (5.2)$$

70ソイド終末KK transit を据え、I.P. = 視準いたとき、station S.2 夾の deflection angle は

$$\alpha_{s,2} + \beta_0 \quad z'' \text{ あり} \quad \text{-----} (5.3)$$

$$\tan \alpha_{s,2} = \frac{[Y_s]_{s=5,2} - Y_o}{[X_s]_{s=5,2} - X_o} \quad \dots \dots \dots (5.4)$$

$$\tan \beta_o = \frac{Y_o}{D - X_o} \quad \text{--- (5.5)}$$

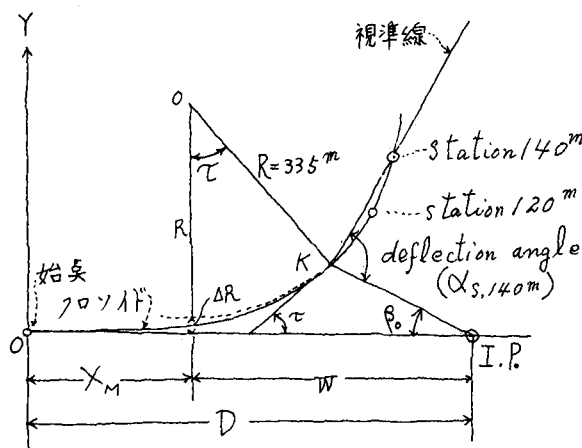
三角法の公式から

$$\tan(\alpha_{s,2} + \beta_0) = \frac{\tan \alpha_{s,2} + \tan \beta_0}{1 - \tan \alpha_{s,2} \times \tan \beta_0} \quad \text{----- (5.6)}$$

$$= \frac{\frac{[Y_s]_{s=\text{station } S,2} - Y_0}{[X_s]_{s=\text{station } S,2} - X_0} + \frac{Y_0}{D - X_0}}{1 - \frac{[Y_s]_{s=\text{station } S,2} - Y_0}{[X_s]_{s=\text{station } S,2} - X_0} \times \frac{Y_0}{D - X_0}} \quad \text{---(5.7)}$$

(5.7)式右边を計算し、左辺の $(\alpha_{s,2} + \beta_0)$ を求めることが出来る。布設は deflection angle $(\alpha_{s,2} + \beta_0)$ を左に振った transit の視準線を、station S.1 から弦長 C. の長さとの切り合い点として station S.2 点を定めることで完成する

§6. 円曲線 station 座標および deflection angle 計算例



クロソイド全長 $L = 104.000$

円曲線半径 $R = 335.000$

接線 O~I.P. 接線 I.P.~Z (図3.1) の交角

$I = 41^\circ 17' 25''$

$= 0.7206513 \text{ radian}$ とするとき

クロソイド および 円曲線 座標 と他の諸元を求めること (図6.1)

(解)

$$\tau = \frac{1}{2} \cdot \frac{L}{R}$$

$$= \frac{1}{2} \cdot \frac{104.000}{335.000}$$

$$= 0.1552239 \text{ radian}$$

$$(\text{ここで } 1^\circ = 10^{-6} \times 4.848 \text{ radian})$$

クロソイド始点の station meter を 0 meter とする

円曲線終点の station meter

$$= L + (I - 2\tau)R$$

$$= L + (I - 2 \times \frac{1}{2} \cdot \frac{L}{R})R$$

$$= R \times I \text{ radian}$$

$$= 335.000 \times 0.7206513 \text{ radian}$$

$$= 241.418$$

$$L = 104^m$$

$$R = 335^m \quad \text{のクロイドについては}$$

$$\begin{aligned} l &= \frac{L}{\sqrt{LR}} \\ &= \frac{104^m}{\sqrt{104^m \times 335^m}} \\ &= 0.5571784 \end{aligned}$$

この l に対する x, y は l の単位クロイド表値の短区間は直線変化するとみて補間すれば

$$x = 0.555836864$$

$$y = 0.02877959$$

を得る

$$\begin{aligned} \text{接線長 } D &= X_M + W \quad \text{----- (3.7)} \\ &= R \left[\left(x l - \sin \frac{1}{2} l^2 \right) + \frac{(y l + \cos \frac{1}{2} l^2)(\sqrt{1 + \tan^2 I} - 1)}{\tan I} \right] \quad \text{----- (3.8)} \\ &= 335^m \left[(0.1550972) + \frac{(1.0040119)(0.3308914 - 1)}{0.8782209} \right] \\ &= 178^m 6835 \end{aligned}$$

つぎに 1 例として

station meter = 140^m 点の X, Y 座標および K 点における deflection angle を求めてみる

$$\begin{aligned} [X_s]_{s=\text{station } 140^m} &= X_M + R \cdot \sin(\tau + \theta) \quad \text{----- (4.4)} \\ &= 51.959 + 335^m \sin \left(0.1552239^{\text{radian}} + \frac{140^m - 104^m}{335^m} \right) \\ &= 51.959 + 86.9914 \\ &= 138.950 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} [Y_s]_{s=\text{station } 140^m} &= Y_0 + R \cos \tau - R \cos(\tau + \theta) \quad \text{----- (4.5)} \\ &= 5.372 + 330.9923 - R \cos \left(0.1552239^{\text{radian}} + \frac{140^m - 104^m}{335^m} \right) \\ &= 336.344 - 323.508 \\ &= 12.8363 \end{aligned}$$

ここでクロソイド終点の X 座標 X_0 , Y 座標 Y_0 は

$$X_0 = \sqrt{R \cdot L} \cdot x \\ = 103.750$$

$$Y_0 = \sqrt{R \cdot L} \cdot y \\ = 5.372$$

つぎに K 点 (図 6.1) における deflection angle ($\alpha_{s,140m} + \beta_0$) を求める

$$\begin{aligned} \tan(\alpha_{s,140m} + \beta_0) &= \frac{\frac{[Y_s]_{s=140m} - Y_0}{[X_s]_{s=140m} - X_0} + \frac{Y_0}{D - X_0}}{1 - \frac{[Y_s]_{s=140m} - Y_0}{[X_s]_{s=140m} - X_0} \times \frac{Y_0}{D - X_0}} \quad \dots\dots\dots (5.7) \\ &= \frac{\frac{12.8363 - 5.372}{138.950 - 103.750} + \frac{5.372}{178.684 - 103.750}}{1 - \frac{3.4643}{35.2} \times \frac{5.372}{74.9335}} = 0.2881241 \end{aligned}$$

$$\therefore (\alpha_{s,140m} + \beta_0) = \tan^{-1} 0.2881241 = 16^\circ 04' 22.8''$$

即ちクロソイド終点 K に transit を据えた時、I.P. を視準しこれから $16^\circ 04' 22.8''$ を左に振った視準線を、station 120m 点から弦長 C_0 で切り合いすれば station 140m 点 が地上に設定される

$$\begin{aligned} C_0 &= R \sqrt{2(1 - \cos \theta)} \quad \dots\dots\dots (5.2) \\ &= 33.5 \sqrt{2 \left(1 - \cos \frac{20m}{33.5m}\right)} \\ &= 33.5 \sqrt{2(1 - 0.998218)} = 19.999 \end{aligned}$$

§7. 結言

クロソイド曲線についてでは (2.15) 式で直接求める、接線長 D は筆者の解析した (3.8) 式で ΔR を求めることなく求めることを示した。これらの助けを借りて、クロソイドに接線する円曲線の X, Y 座標 $[X_s], [Y_s]$ が (4.4) 式, (4.5) 式で与えられた。式の形は平凡だが、利用の開ける式とおもうものであります。円曲線布設の Transit 位置は、(1) X 軸上, (2) クロソイド上, (3) クロソイド終点, (4) 円曲線 station 上の4つのどれをえらんでも、切り合いのための視準線を得るための、deflection angle は (5.6) 式でまかなわれるわけだ。deflection angle の基準視線の前方視点は (1) X 軸上の点 (2) 特に I.P. と地形に自由にせたくつきく点を視準すればよいことになった。最大の特徴は transit を交換する必要のないことで反転に伴う偏荷誤差という心配は不要になった。円曲線の座標解析は deflection angle 法の適用を広範なものにしたと云える (1979.9.22)。